

阪本拓人 著

領域統治の統合と分裂
—北東アフリカ諸国を
事例とするマルチエー
ジェント・シミュレ
ーション分析—

書籍工房早山
2011年 256ページ
7000円+税



本書のキャッチフレーズは「コンピューターのなかでアフリカの内戦を再現したい!」というものだ。その言葉通り、本書は北東アフリカに位置する国々の内戦をコンピューター上のシミュレーションで再現している。事例として取り上げているのは、エチオピア(エリトリアを含む)、スーダン、ソマリア、ケニアである。

シミュレーションの持つ学術的意義を理解するには、国際関係論における分析の方法を把握する必要がある。基本的に国際関係論の目的は、過去に見られた国家間関係上の〈出来事〉を説明することにある。すなわち、なぜその出来事が起こったのか、いかに発生したのかを紐解くのである。その際、重要になってくるのが現実の単純化である。現実にはあまりにも多くの変化が同時に起こっているため、その出来事を規定する変数をすべて考慮することは不可能である。ゆえに、重要だと思われる変数を絞っていくのである。いくつかの重要な変数を組み入れて作り上げたシミュレーションを実施し、そのシミュレーションで現実の状態を再現できれば、その変数は現実にも重要であることになる。こうした認識に立った上で、コンピューター上に「スーダンもどき」「ソマリアもどき」を作り、いろいろ変数を組み替えて実験した成果が本書である(山影 n.d.)。

そのシミュレーションで用いる手法がマルチエージェント・シミュレーション(MAS)という国際関係論に由来した分析手法である*1。この手法を日本で積極的に導入したのが国際関係論者の山影進である。近年、山影のもとで学んだ研究者がコンピューター・シミュレーションを用いた研究で活躍している。本書の著者である阪本もその一人である。彼は国際関係論で使われてきた手法を北東アフリカの国々へと援用することで内戦という国内現象を理解しようと試みたのだ。

MASの特徴は、局所が全体の構造を規定していると考えるところにある。例えば、互いに虎視眈々と隙をうかがう多数の国家が、合従連衡を繰り返しつつ闘争を展開した場合、いかなる状態(全体像)が出現するのかという問いを考えるとしよう(MAS Laboratory

n.d.)。その全体像を考えるためには、まずは国家間の相互作用や国家と環境との相互作用という「局所」が重要となってくる。局所の動態を規定すれば、その動きがあらゆる場所で見られ、全体はおのずと立ち現れてくるはずだ。こうした発想がMASの根底にはある(山影 2010:9)。

本研究が内戦として再現している〈出来事〉とは、タイトルにもある「領域統治の統合と分裂」である。すなわち、一国内で見られる政府ならびに反政府勢力による地理的な支配の割拠である。例えば、第一次スーダン内戦では、政府が北部の統一を維持したものの、南部では反政府勢力が割拠する状態となった。ソマリアでは政府が崩壊した後、全土が分裂状態にある。また、ハイレ・セラシエ下の帝政エチオピアでは、エリトリアの独立闘争をはじめとした反乱に直面している。本書は、こうした統治の割拠状態をコンピューター上のシミュレーションで再現しようとしている。

その再現の仕方をここでは簡単に説明することしよう。まず、著者は内戦を領土獲得のゲームとして捉えている。それぞれの国はメッシュ状に仕切られ、細かい区画(セル)の集合とされる。そのセルを政府および反政府組織が取り合うのだ。

セルには、いくつかの属性が与えられている。第一に、民族や宗教、地域(植民地行政の境界)*2といった住民の社会・文化属性である。例えば、エチオピア(エリトリアを含む)のシミュレーションにおいて、あるセルは「言語民族的にティグリニア、宗教的にクリスチャン、地域的にエリトリア」と規定されている(31ページ)。第二に、セルが擁する資源の量である。これはセル内の人口と1人当たりの所得水準の積、および、天然資源の分布によって規定される。これらセルの属性は不変とされる。

シミュレーションでは、セルの所属を巡り政府および反政府組織が内戦を展開する。初期設定では政府が一国内のすべてのセルを掌握している状態にある。すなわち、国家全土を掌握しているのだ(この政府を「初期政府」と呼ぶ)。もちろん、首都に該当するセルも例外ではない。一方、反政府勢力は「でたらめな属性を持つ[主体]を一定数でたらめに発生」させている(37ページ)。この発生方法は、統治組織の代替を志向する勢力はほとんど常にどこかに存在している、という政治学者チャールズ・ティリー(Charles Tilly)の議論に依拠している(Tilly 1992 一本書 37ページ)。一度、シミュレーションが始まれば、政府と反政府組織の区別はない。セルを統治する主体として同様に扱われる(両者はRulerとして表記される)。もし、反政府勢力たるRulerが首都の置かれているセルを取れば、そのRulerは新たに「政府」となる。

Rulerの特徴をあげておこう。第一に、Rulerは民族

や宗教、地域の偏重で特徴づけられる(偏重がないRulerが発生する場合もある)。例えば、エチオピア(エリトリアを含む)を用いたシミュレーションでは、あるRulerは「言語民族的にティグリニア偏重、宗教的に無差別、地域的にエリトリア偏重」と特徴づけられている。もちろん初期政府は現実に即した属性を与えられている。第二に、Rulerは支配下にあるセルの統治を維持し続け、かつ、新たなセルの獲得を目指すことになる。そのいずれの行動にも資源が必要となる。その資源は、統治下にあるセルから徴収することで獲得されるか、外部からの提供に頼ることになる。前者はRulerによる徴税、後者はRulerに対する国外からの支援を想定したものだ。

シミュレーションでは新たに台頭したRulerはひとつのセルから支配領域を広げていく。つまり、近接するセルを自己の統治領域へと組み込もうとするのである。その一回の試みがシミュレーションの1期とされる。このセル獲得ゲーム下では、(1)資源を多く有するRulerほど、セルを掌握する確率が高くなる、(2)Rulerの偏重とセルの文化・社会属性が近いほど、Rulerはそのセルを獲得しやすい、という設定が設けられている。

シミュレーションでは、このゲームを500期繰り返す。その500期を通じて、初期政府が全土を支配している初期状態から、いかに領域統治が変容し、いかなる帰結がもたらされたのかを検討するのだ。それぞれの国においてこの500期のシミュレーションが20試行実施される。

それぞれの国で20試行行われたシミュレーションは偶然に左右され、すべてが同じ結果になるとは限らない。20試行の中には、現実を想起させる領域分布を作り上げている試行もあれば、そうでない試行もある。例えば、スーダンのシミュレーションでは3つの傾向がみられた。第一に、北部が初期政府によって統一され、南部にはRulerが割拠している状況である。これは第一次スーダン内戦を彷彿させるものといえよう。第二に、北部が初期政府によって統一される一方、南部もひとつのRulerによって統一されている状態である。これは第二次内戦から南スーダン独立への流れを思い起こさせる。そして、第三に、新たに台頭したRulerによって初期政府が転覆させられるという、現実には見られないケースである。

このスーダンの例に代表されるように、それぞれの国で行ったシミュレーションでは、北東アフリカ諸国が現実経験した領域統治の統合・分裂の様態が、ある程度の割合で再現されている。その中には、帝政エチオピアが直面したエリトリアの反乱、スーダンが経験した南北の分裂、ソマリアが経験した統治の極度の分裂、そして、ケニアの初期政府が持つ領域統治の強

韌性(反乱が起きても鎮圧する)を彷彿とさせるものがある(173ページ)。

こうしたシミュレーションの含意は、シミュレーションを実施するに当たり設定された諸変数が、現実世界においても統治の様相を規定しているということである。すなわち、①住民の属性や分布、②1人当たりの所得水準や天然資源の分布、③政府や反政府勢力に見られる民族的・宗教的・地域的な偏重、および、④支配領域からの徴税および外部からの資金援助が、現実の領域統治の統合と分裂をも規定しているというものである。

そのシミュレーションから著者が辿り着いた結論は悲観的である。阪本は1人当たりの所得水準、外部からの資源の提供という可変的な要素をいろいろ変えてシミュレーションを重ねた。それによって領域統治がいかに変化するかを考察したのである。その結果、近代国家による全面的な統治は不可能であるという結論に至った。現実世界では、内戦を収束させる試みとして、主権国家の「承認取り消し」や「新信託統治」、あるいは国境線の改編などという政策が提案されているが、いずれも内戦を統制することはできないとの見解を著者は提示している(224~225ページ)。

ただし、その悲観論には若干の考察の余地があろう。民族や宗教的属性は固定化したものではない。そうした分類は政治的に意味を持つことによって初めて動員の道具となる(cf. Posner 2006)。また、国家形成の過程では、国家内の集団が競合したり協力したりすることでひとつの政体が国家領域の支配に対して正当性を持つようになる(Tilly 1992)。すなわち、人々の属性もRulerの属性も、長期的には可変的なものである。著者はその可変性を否定しているわけではないが、シミュレーションではどうしてもそれらを固定化したものと見なさざるを得ない(31~32ページ)。

もし、著者の行き着いた結論を、著者と同じバックグラウンドに立って反証しようとするのであれば、かつて内戦を経験し、後に平和を達成した国のシミュレーションをすることだろう。過去に内戦を経験した国を、当時の民族・宗教的属性に基づいてシミュレーションすれば、いかなる結果が得られるだろうか。もしかすると、同じように領域の統合は不可能だという結果が得られるかもしれない。そうした結果が得られれば、北東アフリカの国々も安定化の可能性はあるということだ。

本書の今後の課題として、新しい条件でシミュレーションを行うことが必要であろう。現実には、エリトリアはエチオピアから独立した。また、スーダンも南北に分かれた。そして、ソマリアにはソマリランドという実効支配が達成されている地域が存在する。そうした新たな条件を設定し直した上で、新しいシミュレ

ーションをすれば、異なる結果が得られるかもしれない。客観的な分析者として国家統合の可能性はないという結論を提示することは、たしかにひとつの分析として有用であろう。だが、近代国家の統治から逃げるすべがない現代において、その結論はあまりにも悲しすぎる。この結論を一つの結論として踏まえた上で、新しい国家のあり方を模索するのも、また求められているのではないだろうか。

- * 1 国際関係論におけるシミュレーションの系譜は山本(2003)が詳しい。
- * 2 エチオピアの例ではエチオピアとイタリア領エリトリア、スーダンでは北部と南部と閉鎖地区(Closed District)、ソマリアではイタリア領ソマリアとイギリス領ソマリランドといった区分が用いられている。

参考文献

MAS Laboratory
 n. d. 「研究プロジェクト」(2013年8月26日参照)
 (http://citrus.c.u-tokyo.ac.jp/projects/)

Posner, Daniel N.
 2006 *Institutions and Ethnic Politics in Africa*. New York:Cambridge University Press.

Tilly, Charles
 1992 *Coercion, Capital, and European States, AD 990-1992*. Malden:Blackwell.

山影進
 n. d. 「コンピューターのなかの国際社会」(2013年8月26日参照) (http://citrus.c.u-tokyo.ac.jp/mf2007opencourse.pdf)

2010 「人工社会構築指南—artisocによるマルチエージェント・シミュレーション入門—」東京:書籍工房早山。

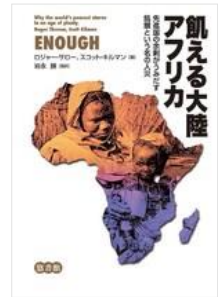
山本和也
 2003 「国際政治学のシミュレーション—歴史と展望—」『東洋文化研究所紀要』第144冊, 391~432ページ。

(岡野英之/日本学術振興会特別研究員・大阪大学大学院国際公共政策研究科)

ロジャー・サロー,
 スコット・キルマン 著
 岩永 勝 監訳

飢える大陸アフリカ

—先進国の余剰がうみだす飢餓という名の人災—



悠書館 2011年
 432ページ 3200円+税

本書は、アフリカの飢餓が先進国における農業政策と食糧援助に起因していると分析した本である。著者は、『ウォール・ストリート・ジャーナル』紙の2人の記者、ロジャー・サローとスコット・キルマンである。彼らは10年以上にわたってアフリカ各国の飢餓について取材を重ね、同紙への連載を共同で執筆してきたが、本書で紹介されている事例の多くはそこで掲載された記事がもとになっている。

本書は二部に分かれ、第一部では、アフリカに緑の革命を起こそうとする動きを、第二部では、飢餓から人びとを救おうとする活動について書かれている。本書は、アフリカのさまざまな国の飢餓を事例としてとりあげているが、以下では、とくに詳細に書かれているエチオピアの飢餓を中心に内容を要約する。

農学者のノーマン・ボーローグは、新たな小麦品種の開発に着手し、1960年までにさび病に耐性があり、丈が短く倒伏しにくいシャトル品種の開発に成功した。この新品種の導入によってラテンアメリカだけでなく、アジア諸国でも小麦生産量は飛躍的に伸びた。この世界的な食糧増産は緑の革命と称され、1970年にボーローグは功績が認められてノーベル平和賞を受賞した。

しかし、緑の革命への賞賛も長くは続かなかった。1975から85年にかけて、世界の主要穀物の生産量は大幅に増加し、それと反比例するように穀物の価格は下落した。先進国は余剰穀物を国外で販売しようとしたが、生産量が増えたアジア諸国は必要としなかった。また、緑の革命は広大な農地で肥料と農薬を大量に使うため、環境保護団体から強い批判を受けるようになり、次第に注目されなくなっていく。

一方で、緑の革命から取り残されていたアフリカでは大規模な食糧増産は起きず、1980年代に入って飢餓が深刻になった。1984年にはエチオピアで飢餓が起こり、その惨状は世界中に報道された。その報道を見たある日本の社会奉仕家は、アフリカに農業革命が必要だと考え、ボーローグに働きかけた。1986年、2人は、

カーター元アメリカ大統領とともに農業開発を目的とした国際NGOを創設し、アフリカ諸国での農業生産の拡大に取り組み始めた。ガーナから始まった農業技術支援は、数十カ国に及び、エチオピアでは、新政権が誕生した1991年以降に始まった。1990年代後半に穀物生産量は倍増し、2002年にはこれまでにない豊作に恵まれた。エチオピア政府は、余剰穀物を国内の食糧不足の地域に輸送しようとしたが、国内の輸送ネットワークは脆弱で地方まで行きわたらなかった。また、国外のバイヤーとのつながりも薄く輸出もできなかった。そのため、収穫された大量の穀物が国内の市場に流れ込み、穀物価格は急落した。豊作によって農家が得た金額はわずかで、栽培にかかる費用を大幅に下回った。穀物価格の下落は、農家の深刻な経営難と生産意欲の減退を引き起こし、降水量が少なかった2003年に再び飢餓が起こった。エチオピア政府は、海外から膨大な食糧援助を受け取ったが、地方都市の穀物倉庫には余剰穀物が手つかずのまま山積みされていた。

著者は、アフリカの飢餓の根本的な原因は、先進国の農業政策やそれに同調した国際機関の飢餓対策にあると考えている。1970年代、世界銀行はアフリカでの貧困解消を目標に農業関連に多額の融資を割り当てていた。しかし、1981年、アメリカにレーガン政権が誕生すると、世界銀行の方針は最大の資金提供国であるアメリカの政治に大きく左右されるようになった。アメリカ政府は、自国の農家に多額の補助金を出し続ける一方で、アフリカ諸国の政府が農家に補助金を出すのを阻止するように世界銀行に働きかけた。穀物の生産過剰に陥っているアメリカの農家は、自国政府に対し買い上げる穀物量を増やし食糧援助に力を入れるように請願した。アメリカ政府は、余剰作物を人道支援団体に与え、人道支援団体は活動対象国でそれを売り、現金に換えた。そして、アメリカの法律にもとづき、食糧輸送の大半はアメリカの輸送業者が行った。農業関連企業、人道支援団体、輸送会社からなる受益団体は「鉄のトライアングル」とよばれ、食糧援助政策を頑強に支持している。

第二部では、アフリカの貧困を解決しようとするミュージシャン、実業家、栄養食品企業などの活動が紹介されている。たとえば、アイルランド出身のロックミュージシャンは仲間とともにバンド・エイドを結成し、1984年のエチオピアの飢饉では、世界中でコンサートを行い、寄付金を募った。彼は世界最大のコンピューター・ソフトウェア会社の創業者とともに支援を行ってきた。また、栄養食品企業はアフリカの10億人の貧困層を有望な市場ととらえ始めている。子供向けのビタミン・サプリメントを開発、販売する企業や、人道支援を目的に作られた栄養強化食品を東アフリカ諸国で配布した企業は大きな成功を収めている。

最後に、著者はアフリカの飢餓解決に向けたいくつかの提案をしている。まず、国際機関は、農業向けのグローバルファンドの構築や農業インフラを向上させるプロジェクトへの投資を行う必要がある。次に、アフリカ諸国は農家に適切な補助金を与え、自国の食糧自給率の向上に努めるべきである。また、アメリカは自国の利益を優先させる食糧援助を見直し、現地調達を視野に入れた柔軟な方法を模索しなければならない。さらに、国際社会は、緊急の食糧支援要請に備える国際穀物備蓄構想を真剣に議論するべきである。

本書は、副題にあるように、アフリカの飢餓は先進国のご都合主義に起因する人災だと分析した点が評価できる。食糧援助は飢餓を解決するためではなく、先進国の余剰作物を処分することが最大の目的になっており、それがアフリカ＝飢餓の大陸という神話を生み出しているという指摘は重要である。その一方で、いくつかの疑問も残る。たとえば、なぜボーローグたちの農業支援は社会主義政権下のエチオピアからではなくガーナから始まったのか？ 2003年の飢餓の後、エチオピア政府が、国内に大量の余剰穀物があることを知りながら食糧援助を受けたのは、国内のインフラが未発達だったことが最大の原因だったのだろうか？ 本書ではほとんど言及されていないが、こうした疑問に答えるには、援助国と被援助国との政治経済的関係を示すことが必要であると思う。

(村橋 勲／大阪大学大学院人間科学研究科・
日本学術振興会特別研究員)

リンダ・ボルマン 著
大平 剛 訳

クライシス・キャラバン
—紛争地における人道援助の真実—

東洋経済新報社 2012年
328ページ 2200円＋税



本書は、紛争地における人道援助の実態を告発した本である。著者のリンダ・ボルマンは、オランダ人のフリージャーナリストである。彼女は、紛争地域における人道援助は、介入する国家に操作され、不透明な財政によって動かされ、戦争当事者たちに利用され続けてきたため、人命を救うという本来の目的を十分に果たせずに、むしろ紛争を長期化させていると主張している。人道援助が、なぜ戦争を長引かせ、より多く

の犠牲者を出す要因となるのか？本書は、人道援助を冷戦後に急速な広がりを見せている現象と捉え、紛争地域での個別の事例から、その問いへの答えを導き出そうとしている。

序章では、2人の代表的な人道主義者の意見の対立について述べられている。ひとり、「赤十字の父」と称されるアンリ・デュナンである。ジュネーブ出身の実業家であった彼は、1859年にアルジェリアでの事業請願のため北イタリアでナポレオン3世に謁見した際にソルフェリーノの戦いに遭遇した。戦場で負傷兵の救済活動に従事し、その経験がもとなり、後に赤十字国際委員会を創設した。彼は、「人類はみな兄弟」を理念として掲げ、交戦中のどちらの兵士に対しても負傷者を助ける義務があると主張した。もうひとり、フローレンス・ナイチンゲールである。イギリス育ちの彼女は、1854年にクリミア戦争で看護婦としてイギリス軍に従軍した。兵舎病院では冬期に数千人の兵士が死亡したが、彼女はこの多大な犠牲の責任は、病院の劣悪な衛生状態を放置したままにしたイギリス軍にあると糾弾した。デュナンは自らをナイチンゲールの崇拜者と公言していたが、一方のナイチンゲールは傷病兵を救う責任は民間のボランティアではなく戦争をおこなう政府が負うべきだと主張してデュナンの考えに反対した。

19世紀に西洋で芽吹いた人道援助は、冷戦後、急速かつグローバルな広がりを見せた。1980年には、約40の国際NGOがカンボジア難民のために活動していたにすぎなかったが、現在では3万7000以上の国際NGOが世界中で活動していると推計されている。援助機関のキャラバン隊は、紛争や飢餓が起こると次から次へと世界各地の被災地を旅するようになった。著者はそれを「クライシス・キャラバン」とよんでいる。

本書でとりあげる事例の多くは、紛争と内戦が多発した1990年代のアフリカである。第1章のルワンダもそのひとつである。ルワンダ内戦では、ハビヤリマナ大統領を乗せた飛行機が撃墜されたことが引き金となって、ツツ住民によるツチ住民への大量虐殺が始まり、3ヶ月で約80万人が犠牲になったとされている。難民キャンプには、世界中のメディアが押し寄せ、連日、犠牲者や被害の状況を伝えた。しかし、著者はメディアであまり注目されなかった事実注目する。難民キャンプには、虐殺から逃れてきた一般市民だけでなく、ツチ系主体の反政府ゲリラによる反撃を受けて撤退してきたツツの兵士も多く含まれていたということである。彼らはキャンプ内に自治政府を作り、国際NGOが届けた援助物資のうちの半分以上を強奪した。

第2, 3, 4章では、ドナーと援助団体の関係に批判の矛先が向けられている。ドナーからの寄付が援助機関の財政を支えているため、ドナーとの契約をいかに

多く獲得するかが援助団体にとって重要である。そのため、どこかで紛争が起きてドナーとの契約を多く手にすると予想できれば、援助機関はできるだけ早く紛争地に移動する。援助機関は営利目的の団体ではないが、資源として人とモノを入手し組織的に利用するという点では企業と変わらない。そのため、ある援助機関はドナーの関心をひくためメディアと行動をともにする。彼らはジャーナリストに航空便と運転手付きの車両と通訳を提供し、ジャーナリストは、戦争で手足のない子ども、飢えでげっそり痩せ細った子どもといった誇張した被害を訴える。そして、ドナーはより新奇な悲惨さに心を奪われ、援助機関に多額の寄付を行うのである。

その一例としてシエラレオネ内戦があげられている。この内戦では1991年からの11年間に推定20万人が殺害された。政府軍と政府側の民兵、反政府軍はさまざまな残虐行為を行った。最初に反政府軍が手足の切断を始めると、難民キャンプには犠牲者が次々と収容され、各国のメディアが殺到した。被害者たちは、援助活動家が来ると、切断された手足を見せ、食べ物がないと訴えた。メディアはそれを取り上げ、見たこともない悲惨な映像に驚愕したドナーは援助団体に多額の寄付金を与えた。

第5章から第8章では、人道援助がいかに戦争当事者によって利用されてきたかが示されている。戦争当事者たちは、国際NGOとの交渉によって食糧を獲得し、彼らに要求したみかじめ料を資金源にして武装する。難民キャンプへ撤退することで分裂を免れ、食糧を確保するという作戦は、反政府組織にとって珍しいものではない。たとえば、第二次スーダン内戦では、反政府軍の兵士は、隣国エチオピアの難民キャンプで訓練されてからスーダンに出撃した。スーダン軍と政府側の民兵は南部の村を焼き払い、住民は国内避難民や難民となった。1989年からは大規模な人道援助が始まり、ケニア北部から毎日、食糧を満載した飛行機がスーダンに入り、上空から援助物資を投下した。この活動で、スーダン政府は物資を投下してはならない村を決め、援助団体は政府の指示に従った。彼らは食糧がどのように使われているか把握できなかったが、反政府軍をおびき出す畏として使われたこともあった。また、援助物資を受け取った住民は政府側民兵に襲撃され、食糧が掠奪されたこともあった。一方、反政府軍の兵士も食糧を援助に依存していたし、ケニアの難民キャンプには反政府組織の司令官やその家族たちが避難していた。著者によれば、援助団体は、戦争当事者たちが協力を取り付けようとするほど多額な資金と豊富な食糧を運ぶようになっており、そのために彼らが紛争で中立、公平を保つことは難しくなっている。

第9, 10章では、紛争に介入する国家が援助団体に

及ぼす政治的影響について述べている。9・11後のブッシュ政権は、自国のNGOに対し「テロとの戦い」への参加を求め、アフガニスタンの子どもたちに届けられる食糧とワクチンがブッシュの好意によって届けられていると十分にアピールされていないと批判した。9・11以降、援助物資のほとんどは「テロとの戦い」を遂行する前線の国家に行きわたったということからも、援助を受けられるかどうかは、貧困の度合いではなく国際社会の政治的動向と関わっていると指摘されている。

結論では、序章でふれたデュナンとナイチンゲールとの葛藤に戻る。デュナンの理念に基づいた赤十字が、第二次世界大戦でナチスに協力していたことは援助活動家のあいだでは「すべての矛盾の本源」といわれ、赤十字はこれを「悲劇的なミス」としているが、著者によれば、現在でも同様のミスが繰り返されている。こうした批判に対し、人道主義者のなかには、もし援助が戦争を長引かせ貧困を助長させているとしても、目の前で苦しむ人を見殺しにできるのかと異議を唱える者もいる。この予想される反論に対し、著者リンダ・ボルマンはこれまでの援助活動が戦争当事者による搾取を上回る効果をあげられていないと否定する。そして、国内での資金調達キャンペーンの空気を台なしにしようと訴えている。

著者が指摘するように、大手のメディアが人道援助に関して、活動団体の財政や政治的な影響について報道することはまずないだろう。その点で、本書は人道援助の「裏側」を明らかにした数少ない一般書のひとつとして評価できる。

しかし一方で、本書が見落としている点をいくつか指摘することもできる。たとえば、援助団体のなかでも国際NGOばかりに注目しているが、紛争地域では地元のNGOもまた数多く活動している。それらが現地でのどのような活動を行っており、国際NGOとどのような関係にあるのか、また難民キャンプではない村落の再建に援助団体はどのように関わっているのか、さらには自然災害など紛争地以外での人道援助についてはどのような状況が生まれているのかということほとんど言及されていない。人道援助は1990年代を境に急速な展開をみせており、人類学者がフィールドワークを行ってきた地域で活動することも珍しくない。このような新たな動向のなかで、地域社会の側から人道援助にかかわるさまざまなアクターと援助活動がおこなわれる場を捉え直していくことが必要ではないだろうか。

(村橋 勲/大阪大学大学院人間科学研究科・
日本学術振興会特別研究員)

嶋田義仁 著

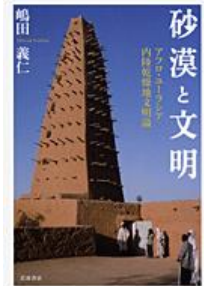
砂漠と文明

—アフロ・ユーラシア
内陸乾燥地文明論—

岩波書店

2012年 286ページ

2800円+税



本書は、「地球人類学者」の嶋田義仁氏によるアフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明についての新たな文明史観である。それは、文明形成における家畜パワーの重要性を提起し、家畜パワーを介してサハラ交易に代表される交易ネットワークを形成し、文明発展の礎となったというものである。

本書は5章で構成されている。第1章では、まず、日本における京都学派の宗教学や民俗学、フランスでの政治人類学、構造人類学など、著者のこれまでの研究を振り返りつつ、西洋の神学思想や人間や歴史性に対する観念についての問題点を指摘する。そして、和辻哲郎の風土文明論や、今西錦司による「京都学派の生態人類学」、梅棹忠夫の「文明の生態史観」などに見られる人間の暮らす空間そのもの(生態環境構造)に視点を置く重要性について指摘する。第2章では、著者が経験したサハラ・サヘル地域の旅や生活の見聞や調査などから、サハラ・サヘル地域を描く。それは、パリ発モロッコの南の果て行きのオンボロバスに飛び乗り、目にしたサハラ砂漠と古い歴史をもつ交易都市との遭遇からはじまった。以降、オアシス都市、ニジェール河湾曲部の都市、レイ・プーバ王国などサハラ・サヘル地域において存在した内陸乾燥地文明をたどっていった。そしてこれらの文明は、サハラをまたぐ広大な交易ネットワークによって結びついていたのであった。第3章では、地理的条件と人間活動との関係の歴史を展望し、熱帯雨林地域のような「生物的自然自体の豊かさ」のない乾燥地が、人類による創意工夫の結果、食料生産の持続性を可能にする農耕・牧畜の技術や、それに関わる資源管理の方法などという「人間にとっての生物的自然の豊かさ」を作り出したという逆説的なプロセスを経て文明が形成されたことを明らかにする。第4章で、生態学的な特徴を基に4分類された地域における文明や宗教などと、それぞれの地域で卓越した家畜との関係よりそれぞれの文明の特徴を明らかにすることで、人間活動と、それを加速させる家畜パワーとの結びつきが文明の発生と発展を促したことを明ら

かにする。最終章である第5章では、それにくわえて、乾燥地の様々な地域において発生した文化や文明が拡散し、再び統合するという多極分散ネットワークによって文明が発展し続けているという、生命・人類史モデルを打ちたてる。

著者は、30年もの長きにわたって調査を続けてきた。「ラクダの群れを連ねてサハラを横切る長距離交易で栄えた交易都市、(中略)乾燥地河川が形成する巨大な氾濫原での、漁民や農耕民の生活」を通して得た経験や育んできた情緒が、このように壮大な文明史観・人類史モデルを紡ぎだしてきたのであろう。

(稲井啓之／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

平野克己 著

経済大陸アフリカ

—資源、食糧問題から開発政策まで—

中央公論新社 (中公新書)
2013年 304ページ
880円+税



近年、欧米諸国のみならず、中国やインドなどの新興国までもがアフリカにビジネス・チャンスを見いだし、アフリカとの関係を再構築する姿勢を見せている。対アフリカ政策において国際社会から大きく遅れていた日本もまた、2013年6月に横浜で開催された第5回アフリカ開発会議で、モザンビークと投資協定を締結し、アフリカをビジネス・パートナーとして位置づけるようになった。このように刻一刻と変化する国際社会におけるアフリカの役割を世界経済の主要アクター(例えば、欧米諸国、新興国、グローバル企業など)の動きから分析し、低迷する経済からの脱却、東日本大震災からの復興という大きな課題を抱えた日本がアフリカと構築すべき関係を提示しているのが本書である。

統計上の数字を見る限り、近年のサブサハラ・アフリカは順調に経済成長を遂げている。しかし、著者はアフリカの経済成長は、アフリカ社会を不安定にさせる諸問題も内包していると述べる。たしかに、本書で示される1人あたりのGDPが1000米ドル、2003年から2008年までの年平均経済成長率18%という数字は、近年のサブサハラ・アフリカ経済の好況を示している。しかし、現在のアフリカ経済を下支えしているのは世界的な資源価格の高騰であり、資源の輸出によって得

られた収入は国民、特に農民の生活向上につながっていない。製造業と農業の衰退、ジニ係数(所得分配の不平等を測る指標で、係数の値が0に近いほど格差が少なく、1に近いほど格差が大きい状態を表す)の上昇は、経済成長を経験しているサブサハラ・アフリカ諸国のもう一つの顔である。著者が最も危惧するのはアフリカの都市化と農業の衰退を背景にして生じる食糧不足である。国際社会は食糧不足に陥ったアフリカ諸国に対して、食糧輸出と食糧援助を増大させると予想され、アフリカの食糧問題は世界全体の食糧問題であると著者は指摘する。

このようなアフリカが抱える問題の解決に必要なこととして本書で主張されるのは、途上国国民の生活向上のみならず、ドナー国の国益も重視する国際開発である。著者はまず、「人類社会から極端な貧困をなくし、世界全体の共存共栄をめざす」という国際開発の理念はODAの政策効果を減退させると指摘し、必要なのはドナー国の国益にかかった、費用対効果の高い開発援助政策であると主張する。すなわち、途上国国民の生活向上とドナー国の国益の両方を重視する、アフリカ諸国とのビジネス・パートナーシップの構築こそが、世界全体の生産力を増強し、途上国のみならず世界も救うと、著者は考えるのである。

そこで重要なアクターになるのが企業である。著者は投資対象地域との連携と共存繁栄を重視する業務思想を持つ企業のアフリカ進出に期待を寄せている。利益の追求を基礎とした業務思想ではなく、社業の重要な柱として企業の社会的責任を果たすような事業を組み込んだり、進出先の社会とどのようにかかわっていくのかを真剣に考える、という業務思想こそが、企業とアフリカの両方を成長させようと本書は示唆している。

また、著者は日本企業の積極的なアフリカ進出が日本とアフリカの望ましい関係構築の突破口となると期待している。最終章では、アフリカが日本再生の鍵を握ることが確認される。今の日本が取り組むべきことは、民間企業と公共機関が協力して国益に関する認識をかため、アフリカとの新しい関係を共同で構築していくことであると著者は説く。

本書の興味深い点は、これまでのように援助対象地域としてアフリカを描くのではなく、投資対象、ビジネス・パートナーとしてアフリカの価値を見いだし、経済が停滞している日本に対してアフリカ進出を指南している点である。例えば、第1章ではアフリカに進出する中国が抱える課題が提示されている。「新植民地主義的」という国際社会からの的外れな批判にどう対応していくのか、投資に見合った利益をアフリカからいかに回収するのか、アフリカの内政にいかにかん渉し、そのときに国際社会に対してどのような立場を表明す

るのか、投資対象としてアフリカ社会といかにかかわっていくのかという課題である。しかし、これらの課題は中国に限らず、今後日本が直面する課題でもある。

このように本書のいたるところに、日本のアフリカ進出成功のためのヒントがちりばめられている。本書は、これまで「アフリカ」と聞いてもピンとこなかった、日本の経済再生の一翼を担う企業関係者、若いビジネスマンや学生に読んでもらいたい一冊である。

(伊藤義将/京都大学アフリカ地域研究資料センター)

石本雄大 著

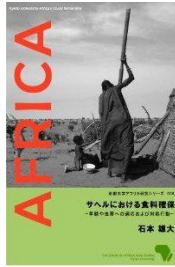
サヘルにおける食料確保

—早魃や虫害への適応および対処行動—

松香堂書店

2012年 178ページ

2000円＋税



1968～73年、1982～85年にサヘル地域を襲った大早魃は、合計で400万人以上の命を奪ったとされる。現在でも早魃は度々生じており、国連の発表では早魃の発生する頻度は年々増加する傾向にあるという。サヘル地域は降水量が少ないだけでなく、降雨の年較差が大きく、降雨パターンの変動も年ごとに大きく異なる。降雨のパターンによっては降水量が確保されたとしても作物不足が生じ、作物がうまく育ったとしても大量発生したサバクバッタにより作物が食い荒らされてしまうこともある。変化が大きく不安定な環境を有するサヘル地域で生きるには、いつ起きるかわからない食料不足への迅速で柔軟な対応が必要とされる。

著者は以前からサヘル地域に暮らす人びとの生活、特に食料確保という点に強く興味をもっていたが、サヘル地域の食料確保の実態を詳細に綴った文献に出会うのは容易なことではなかったと語っている。本書は、著者が実際にサヘル地域に赴き、農耕、家畜飼養、採集活動、出稼ぎ労働、その他の現金稼得活動を包括的に調査した結果がまとめられている。そこにはサヘル地域の不安定な環境に長きにわたって対峙してきた人びとの知識の蓄積と、何度となく直面する早魃や虫害による被害を前にしても、なお前向きで力強くある彼らの姿勢が記述されている。

本書はブルキナファソの半乾燥地に暮らすケル・タマシエク(トゥアレグ)の人びとを対象に、食料確保システムに関して、(1)早魃や虫害など、不測の事態へ

の事前準備としての日常的な適応行動、(2)災害の発生状況下および発生後の食料危機時の対処行動の2点に着目して分析をおこなっている。著者が調査をおこなっていた期間のなかで2004年は早魃と虫害により農作物がほとんど収穫できなかった年となった。著者はこの時のケル・タマシエクの対処行動を中心に、彼らの食料確保システムの詳細な分析をおこなっている。

第1章ではケル・タマシエクが営む生業活動および消費活動にかかわる先行研究をまとめ、サヘル地域における食料確保システム研究の重要性を明らかにしている。第2章では調査地の概要が説明され、生態環境と社会の双方が変容しつつあるサヘル地域のなかでケル・タマシエクの人びとの置かれている状況についてまとめている。第3章では不安定な環境下でおこなわれている農耕活動と早魃年における変化、第4章では家畜飼養の実態、とくに家畜の水・飼料確保、第5章では採集活動における採集植物の定量的なデータ、食料不足時の採集活動の活発化についての詳細な記録をおこなっている。第6章では出稼ぎの浸透の経緯とその実態、第7章では出稼ぎ労働以外におこなわれる現金稼得活動の内容について明らかにされている。そのうえで、それらの活動による通年での食料確保への貢献度を第8章で分析している。第9章では、ケル・タマシエクの消費活動に着目し、食料不足が生じた際の世帯における消費について述べられている。第10章では生産活動・消費活動の単位となる生計単位の形成によって成立する労働力管理、消費システムの存在を明らかにしている。終章では、環境変化に応じた食料獲得活動の柔軟性についての包括的な評価と食料確保システムの変化に触れ、システムが抱えている問題についての指摘もおこなっている。

東西に長くのびるサヘル地域には数多くの民族が暮らしている。サヘル地域の変化は短い時間スケールでの変化も大きい、長い時間スケールでも変化が大きい。そこに社会的な変化もあいまって、農耕民、牧畜民ともに生活の大きな変化を経験している場合が多い。そういった変化の最中で、つねに食料不足という問題が傍らにあった。そのなかで形成された食料確保システムは、地域・民族ごとに生活環境に合わせた多様な特徴をもっている。本書の着目するケル・タマシエクは、本来は家畜飼養を中心にしてきた民族であるが、現在は環境に適応した農耕をおこなっており、災害リスクの軽減のために創意工夫のもとに出稼ぎを取り入れている様子が記述されている。しかし、新たに政治社会情勢の変化へのリスク対応をする必要性がでてきたことも同時に指摘されている。

サヘル地域の食料確保システムは多様であるが、他の生活環境で応用できる可能性もあり、問題点が共通

することも考えられる。本書でおこなわれている食料確保システムの詳細な分析は、今なお問題となっているサヘル地域の食料不足の改善点と、新たに生じうる問題点を見出すためにも重要な試みであると考ええる。

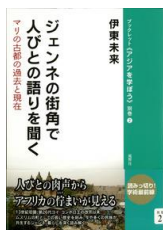
(桐越仁美/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

伊東未来 著

**ジェンネの街角で人びとの語りを聞く—マリ
の古都の過去と現在—**

(ブックレット《アジアを学ぼう》別巻②)

風響社 2011年 56ページ 700円+税



本書は、マリの中部ジェンネの過去と現在のありようをつづったものである。ジェンネ語で「ワンダス」と呼ばれる人びとの語りとともに、2007年から2010年にかけて計2年間調査をおこなった著者自身の経験が平易なことばでいきいきと描かれている。人類学を専門とする著者は、現在日本学術振興会特別研究員(PD)として南山大学に所属している。なお本書を含むブックレット・シリーズは、松下幸之助記念財団(旧松下国際財団)の奨学生による留学の成果発表として発刊されている。

マリ中部のニジェール河内陸三角州に位置するジェンネは、古くからの交易都市である。15~16世紀をピークにサハラ縦断交易の拠点として栄えた。交易を通じたムスリム商人との交流から、ジェンネは一帯の重要なイスラーム学術都市としても発展した。また、1988年にはユネスコの世界文化遺産に登録されており、年間1万人以上の観光客が訪れる観光都市でもある。

第1章では、こうしたさまざまな顔をもつジェンネの紹介がなされた後に、著者の調査地入りの様子が描かれる。読者は著者の経験を追体験するようにして、人びとを惹きつけ続けるとともに「よそ者が入りづらい」町でもあるジェンネの路地へと導かれる。

第2章では、ジェンネの興りから王のイスラームへの改宗、ソンガイ帝国とモロッコによる侵攻、そしてフランスによる植民地支配までの歴史が時系列に沿って描かれている。時系列に沿ってといっても、淡々と「史実」が示されていくわけではない。著者が「歴史は常に今を軸に参照される」というように、そこでの語りは、歴史が現在に開かれ、人びとのあいだに生きられている様を示している。それは例えば、植民地期に白人兵

に追われた人びとが自身の一族の家に逃げ込んできたことを話す男性の語りに表れている。生前のその出来事を彼は実際に見たわけではないが、神の力により守られた「われわれ」や銃弾を浴びた「その扉」といった彼の語ることばは、歴史が「いまここ」にあることを示している。

第3章では、現在の人びとの生活が描かれている。まず、ジェンネの言語状況が記される。多民族が住まうジェンネでは日常的に多くの言語が飛び交っている。こうした多言語状況においては頻繁にコード・スイッチングがみられる一方で、民族の枠を超えた共通語であるジェンネ語が重要な役割を担っているという。つぎに、異民族を結びつけ、ジェンネをひとつの都市たらしめている2つの社会的なネットワークとして、居住単位である「街区」と年齢階梯組織や種々のアソシエーションなどの「社会組織」が挙げられる。街区の会合でのやりとりや女性組織での試行錯誤など、これらの活動の様子やそこでの作法が描写されている。最後に、ジェンネでは頻繁にその存在が語られるというチャルコ(妖術師)、アセタン(悪魔)、ジン(精霊)、ウアクラ(小人)などの目に見えぬものたちとのかけひきや協同が豊富な語りから描かれている。この章では、こうした不可視の「隣人」も含めたさまざまな他者との共生のあり方が示されているといえる。

本書の魅力はなによりも語りの豊かさにある。ジェンネの人びとから発せられた種々の語りは、どれも興味深く引き込まれるものである。また、そうした語りからはしばしば著者自身の声も聞こえてくるようである。ジェンネ語の「ワンダス」が「語り」とともに「おしゃべり」を意味するように、本書で示される語りはジェンネの人びとと著者とのやりとりとしてある。そうしたやりとりとしての語りからは人びとと真摯に向き合い奮闘する著者の姿勢が窺える。ジェンネに入り、調査を始めるところから帰国までの著者自身の経験の語りも添えられた本書は、都市ジェンネの民族誌としてだけでなく、評者のような調査の途上にある者やこれから調査地へ向かう者にとっての手引きとしても読むことができるだろう。

(今中亮介/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

高野秀行 著

謎の独立国家ソマリ ランド—そして海賊国家 プントランドと戦 国南部ソマリア—

本の雑誌社
2013年 509ページ
2200円+税



ソマリランドは、バックパッカーにとって有名な「秘境」だ。評者がソマリランドについて初めて知ったのは、2007年にバックパックでアフリカを旅していたときのことだった。バックパッカーたちは安宿で酒を飲みながら旅行譚を披露しあうのだが、アフリカじゅうを旅した猛者たちが語る最上級の武勇伝のひとつがソマリランド奇譚であった。無政府状態であり崩壊国家である「リアル北斗の拳」ソマリアの一部に外国人が旅をすることができるほどの治安を維持する独立国家がある。こんなにも冒険心をくすぐる話はなかなかない。著者をソマリランドに向かわせた第一のきっかけは、少し乱暴な解釈であるがバックパッカーのソマリランド熱と似ている。つまりそれは、なにはともあれ自分の目でソマリランドの状況を確認したいというものだった。「謎」と「未知」が三度の飯より好きだという著者は、「地上のラピュタ」独立国家ソマリランドを目指して旅立つのである。

ソマリアでは、1991年にシアド・バーレ政権が崩壊したあと、1993年に国連の平和維持軍が撤退し、事実上の無政府状態が続いている。2000年代になってアメリカや近隣諸国の支援によって暫定政府が樹立されたが、現在にいたるまでイスラム系組織との戦闘が続いている。さらに近年では、アフリカの角の先端部分、つまりソマリア北部に位置するプントランドを中心として海賊行為が横行している。一方でシアド・バーレ政権の崩壊後、角の先端部から紅海沿いにジブチとの国境まで広がるソマリランドは、1887年から1960年まで存在したイギリス領ソマリランドの国境線にもとづいてソマリアからの「独立」を宣言した。そしてソマリランド内での紛争を経て1996年に独自に和平合意を達成し、現在にいたるまで平和を維持している。本書のなかで著者は、このようなソマリアの歴史を読者にわかりやすく説明したうえで、2度の渡航をとおして著者自身が出会った人びとの視点から見た社会状況を詳述している。

まず1度目のソマリランド渡航をもとに、まちなか

で誰も銃をもっていないソマリランドの状況、「せっかち」で「超速」なソマリ人の気質、ソマリ人にとってはなくてはならないカート(アラビアチャノキ)とその社会的な役割、そしてソマリランドの観光案内にいたるまでが細かに記述されている。なかでも、この1度目の渡航で著者は、ソマリランドの平和構築を理解するための糸口をつかむ。それが「ヘール」と呼ばれるソマリ人の「伝統的な掟」である。「ヘール」のひとつに、人が殺されたときに殺人者の氏族が死者の氏族に対して賠償を支払うことで死を清算するという規則があり、著者はこの死の清算がソマリランドの紛争に終止符を打つ和平合意を成立させた鍵であると推測する。ただし著者はのちに「ヘール」が「契約」とも訳せることを知る。すなわち「ヘール」とは、個人間や集団間で交わされた合意にもとづいて守らなければならないこと、というのが核の意味である。

ついで2度目の渡航を果たした著者は、プントランドとソマリアを目指す。プントランドでは海賊ビジネスの仕組み、ソマリアでは無政府状態の現状やアル・シャバーブによる支配について貴重な記録を残している。そして、ソマリランドで実現されている平和への考察を深めていく。そのなかで著者は、和平合意の要であると考えていた死の清算が、独立宣言後から続いた紛争期に発生した数千人の死に対してはまったくおこなわれなかったことを知る。人びとが経験した紛争は「伝統的な掟」の適用範囲から逸脱していたために、長老たちは死の清算をおこなわないという決定を下した。すなわちソマリ人の日常生活を超えた紛争のあとに、氏族の長老たちは新たな「契約」を結ぶのではなく、国をつくるために政治をもちいるという判断をしたのである。ソマリランドでは、氏族が政治を監視し欠点を補うことで民主主義的な政治が実現し、憲法はすべての氏族によって合意された「ヘール(契約)」である。このことから、著者は氏族のシステムと民主主義が補完し合い、また融合することで平和が実現しているという結論を示す。

しかし一方で、もっとミクロな視点にたったときに明らかにされていないこともある。未曾有の大量の死は、殺人者の親族と死者の親族の社会関係を破綻させて、忘れがたい悲惨な記憶を残すといったように、解決すべき重要な問題をはらんでいることは、ほかの紛争地域の事例からも明らかである。紛争の大混乱を経験した草の根の人びとは、如何なる死も清算しないという長老たちの決定や、清算されていない無数の死とそれをとりまく社会関係に対して違和感を覚えることはないのだろうか。草の根の人びとのあいだで紛争処理のための「ヘール」は結ばれないのだろうか。そんな疑問が去来するが、ここからは研究者の仕事であろう。

本書は「超速」のソマリ人に息も絶え絶えにくらいつ

いていく著者の姿をビビッドに伝え、また、ソマリア
 一帯の状況を過度に悲劇的に語ることなく、そこにあ
 る事実を率直な言葉によって描いている。本書は、読
 者に対して紛争処理や平和構築に関する多くの示唆を
 与えるとともに、冒険心だけでなく研究心をもかきた
 てる痛快な一冊である。

(川口博子／京都大学大学院アジア・
 アフリカ地域研究研究科)

織田雪江 著

コーヒーモノガタリ
 Coffee Story

アフリカ理解プロジェ
 クト
 2012年 32ページ
 1500円+税



本書は、日本人の生活に身近なコーヒーを切り口と
 し、アフリカの文化と、人びとの暮らしと課題、そし
 て私たちのとるべき行動を「学ぶ」ことを目的とした教
 材である。発行元のアフリカ理解プロジェクトは、ア
 フリカ理解を通じて、グローバルな視野を持つ人材育
 成を目的として活動する「開発教育」の理念を基盤にお
 く国際NGOである。中学、高校の社会科教諭でもある
 著者は、コーヒーの「生産者の顔」が見えるようにする
 ことや、「フェアトレード」について学習できる教材を
 作成するために、2008年にエチオピアに渡航した。そ
 の時に現地でも触れたエチオピア独特のコーヒーセレ
 モニーや、牧畜民カラユの人びとのコーヒー文化に感銘
 をうけたという。その経験を日本の人びとにも伝えたい
 という想いを、この旅で出会った発行元との協働によ
 って実現したのが本書であり、日本の小学校から大
 学、企業の社会貢献研修などで行なわれる参加型学
 習の教材として活用できる内容となっている。

本書の前書きには以下の5つの目的があげられてい
 る。(1) コーヒーの生産工程とエチオピアのコーヒー
 をめぐる文化を知る、(2) コーヒーにまつわる経済格
 差の現状を認識する、(3) フェアトレードコーヒーを
 生産するタンザニアのルカニ村で起きたコーヒー危機
 (コーヒーの国際価格の暴落で村が受けた負の影響)の
 状況を知る、(4) 多面的な視点でフェアトレードを捉
 え、批判的な思考を養う、(5) コーヒー農家の現状を改
 善する方策を考え、問題を解決する態度を養う。これら
 の目的を達成するために、著者は以下の8つのテーマ
 を用意している。

- 1 コーヒーをめぐる多様な文化
- 2 コーヒーの生産国と輸入国からみえること
- 3 コーヒーの価格を決めるのはだれ?
- 4 タンザニアのルカニ村を訪ねてみよう!
- 5 フェアトレードのコーヒーのパッケージを比べてみよう
- 6 フェアトレードのポップをつくろう
- 7 コーヒー農家の現状をより良くする方法を考えよう
- 8 「フェアトレード」とのつきあい方を考えよう

コーヒーの文化について考えるテーマでは、付属の
 コーヒーの生豆・葉・殻の写真や、エチオピアで使わ
 れるコーヒーポットとカップの副教材を用いて、コー
 ヒーセレモニーを体験し、コーヒーの作物としての特
 徴や、現地での飲み方について理解する(テーマ1)。続
 くテーマは、付属のワークシートをもちいて、統計資
 料の読取りや、モノカルチャー経済、国際価格の変動
 要因、一般市場とフェアトレードでのコーヒーの価格
 の決め方の相違について、経済の視点から学習する(テ
 マ2, 3)。次に、写真から得られる情報をもとに、
 話し合いを通じて各学習者が抱く印象を共有し、タン
 ザニアの農村に暮らす人びとの生活について理解を深
 める(テーマ4)。続いて、日本で手に入るコーヒー豆
 のパッケージを用いて、価格以外の特徴を探しだし、
 フェアトレードの基準について考える(テーマ5)。残
 りの3テーマは人に伝える力を育てることを目指す。
 これまでの学習で理解したことを踏まえて、学習者が
 カフェをつくると想定し、ポップでお客に何を伝える
 べきか考え、それを表現する力(テーマ6)を鍛え、ダ
 イアモンドランキングという、いくつかの選択肢に優
 先順位をつける方法を用いて、与えられた課題に対す
 る解決方法を提案する力(テーマ7)を磨く。そして、
 フェアトレードといかにつきあっていくのか、様々な
 意見をまとめあげ発表する力(テーマ8)を養う。

本書には以下の3つの大きな特徴がある。1つ目は、
 最初から本書を薦めたり、2ページで紹介されている
 ティーチングプランに従ってもよいが、学習者の属性
 や人数、知識の量などに応じて、利用者が本書の使い
 方を自由にアレンジして使うことができる構成になっ
 ている点である。2つ目は、同梱されているアフリカ
 の臨場感あふれる写真教材や、別売りの実物補助教材
 を適所で組み合わせることで、アフリカをより身近に
 感じることができる仕掛けが施されている点にある。
 モノやデータを適所に用いた参加型の学習を通じて、
 効果的に個人の主体的な学びを促進する創意工夫がな
 されている点が本書の大きな魅力である。3つ目は発
 行元の代表者で開発教育の分野で精力的に活動する白
 鳥くるみ氏はじめ、アフリカ研究やアフリカを対象と
 した開発援助の最前線で活躍する人びとが、本書の製

作に協力している点である。彼らの知見が非常にわかりやすい表現で取り入れられている点も本書の価値を高めている。

ここまで参加型の優良な教材として本書を紹介してきたが、通常の読みものとしても価値がある。行動力や思考力を養うことを手助けする本書は、特にアフリカでの開発援助の実務や、研究者として関わることを目指す高校生や大学生にお薦めしたい。本書はアフリカを深く理解するのに有効な手段と筆者が考える、五感を使って感じ、考え、行動する「フィールドワーク」の基本的な作法を育ててくれる要素が大いに詰まっている。ないものねだりではあるが、実際に課題を讀者自身が設定できるようなヒントを提供し、讀者が主体的に興味や関心に向かって「フィールドワーク」できる仕掛けが備われば、実践的な教材としての価値はさらに高まったであろう。今後もアフリカ理解プロジェクトによる、このような優れた本の製作試みが継続的におこなわれていくことを期待してやまない。

(田中利和／京都大学アフリカ地域研究資料センター)

常見藤代 著

女ノマド、一人砂漠に生きる

集英社新書
2012年
254ページ 760円＋税



真っ青な空と印象的な老女の笑顔で飾られた表紙を見たとき、この女性が一人砂漠で暮らす女ノマドなのかと驚きを感じるとともに、彼女が女一人でいったいどんな生活をしているのか興味を抱いた。エジプトの砂漠でたった一人ラクダを連れて暮らしている女遊牧民サイダと著者が初めて出会った時、彼女は56歳であったという。

冒頭では著者がサイダとの生活を始めるに至ったいきさつが述べられている。自分を変えるため海外へ幾度となく渡航し、知り合いのいない場所で現地の人びとの生活に入り込む体験から、写真や文章で表現するフォトジャーナリストという仕事に興味をもった。そして自分だけのテーマを追い求め世界一周をしようと思いつき、出会ったのがエジプトと遊牧民であった。遊牧民のほとんどが遊牧生活をやめ定住地で暮らす中、今も女一人でラクダとともに遊牧をつづける茶目っ気

たっぷりのサイダとの出会いは、著者の「心の底から打ち込めるテーマ」との出会いそのものであった。

本書は、サイダをはじめとするイスラムの人びとと、日本人である著者とのできごとや対話のエピソードで構成されている。第1部では、荒涼とした砂漠での生活に伴う危険と水の大切さ、空を埋めつくす星を見ながら過ごす夜、日々感じる価値観の違いなど、著者がかれらとともに経験し、感じたありのままが綴られている。どんな危険が砂漠にあるかと、泥棒と隣りあわせて、排ガスやごみがあふれ、薬が入った飲み水しかなく、常に同じ場所に留まる町での暮らしは、サイダにとってはより厳しく、苦しいものであるようだ。彼女は定住地で暮らす夫や子供たちの誘いにもいっさい応じず、生まれてから今までずっと砂漠で暮らしてきた。そんなサイダと暮らしをともにするなかで、著者もまた、砂漠での生活の厳しさに戸惑いながら、自然の営みとともに生きる自由な暮らしとサイダが持つ生き方への強い誇り・信念や確固たる哲学に魅せられ、かれらの世界へどっぷりとつかってゆく。初めは何もできず写真を撮りながらサイダについていくのみであった著者が、砂漠でよく食される炭と砂で焼くゴルスというパンを一人で作った時のエピソードは、「お客様」を卒業し、サイダとの関係が深まった出来事として第1部を締めくくる。

第2部「うつりかわり」では、近代的西洋的価値観への接触を機に生じたかれらの暮らしや心の変化を、遊牧生活と町での生活、遊牧民とそうでない人びと、結婚や出産の今昔を対比しながら描き出している。定住地で観光客相手の仕事をするようになった遊牧民たちは、集まって暮らすことで互いの間に軋轢がうまれるようになった。かれらは過去に遊牧していた頃を懐かしみ、現在の定住生活を、「物があふれて心が忙しくなった」と表現する。

第3部では、サイダとサイダに近い女性たちと過ごすなかで著者が見た、イスラム世界の「男と女」を、遊牧民女性が戒められる際よく使われる「アイブ」という概念とイスラム教の教えをまとめつつ、一夫多妻が一般的なかれらの恋愛事情や夫婦生活、同じ夫をもつ二人の妻の関係など、イスラム女性の本音と建前を赤裸々に描いている。

人は一人では生きられない。女一人砂漠で暮らすサイダも、他者との深いつながりのなかで生きている。著者が一人の日本人女性としてかれらとともに過ごしてきた10年間をまとめた本書は、消えゆく遊牧民やイスラム女性の内実だけでなく、かれらが持つまったく異なる価値観をとおして、読者に自分自身を見つめなおすきっかけを提供するだろう。

(野口真理子／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

孫曉剛 著

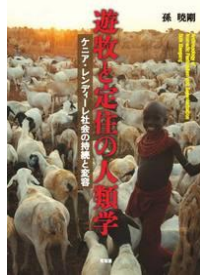
遊牧と定住の人類学

—ケニア・レンディーレ社会の持続と変容—

昭和田

2012年 232ページ

6000円＋税



本書の冒頭には、「人」と「家畜」と「自然」とがみごとに調和した美しい写真の数々が飾られている。家畜とともに歩き、家畜の供するものを食べて生きている遊牧民の引き締まった肉体は、どこまでも高く頭上に広がる空と、褐色に乾燥した大地とのほざまに渾然一体となって溶けこんでいる。なめらかな肌膚に赤い布をまとい、木の杖を片手に誇らしげに家畜のかたわらに立つ彼らの姿は、あたかも過去数十年にわたってうつり変わることがなかったかのようにすらみえる。

しかし、今日の遊牧民は、外部世界から孤立し自給自足的な生活を営む人びとではない。著者は、きびしい自然環境だけではなく、遊牧社会を包摂するマクロな政治的・経済的状況の変動とその影響に対してすら、融通無碍に対応してみせる遊牧民のしなやかな生き方を描き出した。本書は、ケニア北部の半砂漠地帯に住むラクダ遊牧民レンディーレの社会を対象とした、計28ヵ月のフィールドワークにもとづく著者渾身の研究成果である。

1970年代後半に同じ地でおこなわれた生態人類学的な研究と比較すべく、著者は1999年からフィールドワークを始め、レンディーレの現在の遊牧活動を緻密に調べあげた。過去との比較をおこなうことで、遊牧という生業経済の持続性とその変容を追跡することができたのである。みならうべきは、過酷な乾燥地域における長期のフィールドワークのなかで、著者が膨大な量の定量的データを収集し、その生態学的な研究成果を社会・経済人類学的な分析とみごとに融合させている点であろう。牧夫とともに長距離にわたるラクダ放牧に追随し、乾燥した大地を歩き続けて調査をおこなった著者の強靱な肉体と精神には、ひたすら感服するしかない。

本書は全7章からなっている。レンディーレをとりまく自然環境および社会環境の不確実性が説明されたのち、定住化にともなう生活条件の変化に対する人びとの対応と、遊牧を維持するための放牧管理の実態が詳細に分析されている。地域の商品・貨幣経済システムと接続した新たな経済活動が、人びとの考え方や価

値体系、そして行動原理にまで影響を及ぼしていることが細かく説明される。定住化という大きな社会変容にさらされたレンディーレの姿は、ともすると外部世界からの影響に翻弄されているかのように受け取られるかもしれない。だが、著者がつよく主張しているのは、自らをとりまく政治的・経済的・社会的な環境の激変に対しても、基本的な遊牧の姿を変えることなく保持し、新たな活動を模索・実践し続ける、遊牧民レンディーレの驚嘆すべき柔軟性であった。

以下では、第3章と第4章で述べられている、遊牧活動を維持するための社会的な対応と、放牧管理の実態についておもに紹介しよう。

1970年代のレンディーレの居住様式は、季節変動に応じて移動する集落と、牧草や水場などの状況に応じてひんぱんに長距離を移動する家畜の放牧キャンプとのセットで構成されていた。レンディーレは、季節変動とともに増減するミルクの生産量を考慮しつつ、集落とキャンプを離合集散させて、ミルクを口にできる人びとの数を調整し、自然環境への適応をとげてきた。しかし2000年代になってからは、ケニア政府や国際機関による開発援助や定住化政策の実施にともなって、この地域にも町が発展し、その施設や商品・貨幣経済にアクセスするために、レンディーレの集落の大半は、町の近郊に定住化するようになった。そして、植生が稀薄な町近郊の地域では、多くの家畜を飼養できないため、放牧キャンプは町から遠く離れた場所につくられた。

しかし、集落が放牧キャンプにおける遊牧活動と切り離されてしまったかということ、そうではない。人びとは放牧キャンプに労働力を供給するために、集落内の市帯間でさまざまな協力関係をつくりあげ、畜産物の分配と消費から、子どもの世話などの日常生活まで、ひとつの拡大家族のように協力しながら暮らしていた。つまり、遊牧活動における協働関係は、集落における日常生活のなかでの社会関係にも浸透したものであったのである。また、集落周辺に井戸を掘ることで、家畜が放牧キャンプから集落へ給水に立ち寄ることを可能にさせたり、増減するミルクの生産量に応じて放牧キャンプと集落間で人員を移動させ、効率的に畜産物の消費をおこなうなど、人びとは新しい居住様式に適応したさまざまな試みをはじめていた。

著者がちからを込めて記述しているラクダやウシの放牧管理においても、社会変容に対応する人びとの柔軟性が見られた。1970年代のラクダの日帰り放牧では、通常、成獣のラクダ群1群につき1人の牧童がついて放牧し、幼獣個体はいくつかの群れのものをまとめて1つの放牧群をつくり、1人の牧童が世話をしていた。このような放牧群の構成を本書では「幼獣分離方式」と呼んでいる。しかし著者による近年の調査では、別の

スタイルで放牧群が構成されていた。すなわち、異なるラクダ群に属する幼獣個体をお互いに交換して成獣と混ぜてしまう「幼獣交換方式」である。この2つの方法を比べてみると、幼獣交換方式には、1つの群れに成獣だけでなく体力がない幼獣もいるため、遠く離れた場所まで放牧できないという欠点がある。いっぽう、必要な労働力を比較してみれば、幼獣分離方式は、たとえば2つのラクダ群について、成獣群の牧童2人と幼獣群の牧童1人の、計3人の牧童が必要であるのに対し、幼獣交換方式はそれぞれの幼獣を交換するだけなので、牧童は計2人いればよい。つまり、幼獣交換方式は、労働力の節減を可能としているということになる。結婚年が集中することによる世代別人口の偏りや、学童の出現などによって生じている牧童不足を、こうした放牧群の構成ひとつで解消することができるのだ。

また、半砂漠地帯であるレンディーレ・ランドには、ウシ放牧に適した植生や水場がある土地は、まばらにしか点在していないという。つまりウシ放牧には、広い地域を移動する多大な労力とともに、各地で利用できる資源についての詳細な知識が必要とされるというわけだ。それでも、近年のレンディーレではウシの飼養が増加しているのだが、その背景には家畜市におけるウシの市場価値の高さがあった。レンディーレは、ウシを積極的に売却して現金経済に柔軟に対応している。そして、それを支えていたのは、遊牧という生業のなかで脈々と受け継がれてきた放牧管理にかんする知識と技術だったのである。

「ラクダはここにいる、ウシもここにいる、そして小家畜もここにいる。彼はまだ何かほしいのか」(141ページ)。都市に出稼ぎに行った息子について、レンディーレの長老が著者にはなったこの言葉は、多くの家畜をもつことでは人生に満足することができなくなったレンディーレの価値観の変容を端的に指摘している。しかし、生計戦略が多様化し、外部世界との接続も積極的になされるようになったとはいえ、それでも、遊牧という生業のなかで社会的・文化的にはぐくまれてきた遊牧民として生きる精神は、人びとの根底で揺らぐことなく流れ続けているのだ。

高い空と褐色の大地のはざまに溶けこんでいるかにもみえたレンディーレの人びとと家畜たちの姿の背後には、じつは複雑な世界との無数の回路がかくされていたわけである。これまで政府の介入から遠いところに位置していたレンディーレにも、21世紀には大きなグローバル化の波がおしよせることだろう。そのとき、われわれはレンディーレの遊牧社会が動揺するすがたにショックをうけ、彼らにそなわっていたはずの柔軟な姿勢を見失ってしまうかもしれない。だがそのようなときにこそ、本書をあらためて手にとって遊牧民に

通底する精神のあり方を見なおし、ふたたび現実の社会の動揺と向き合えば、そこには遊牧民がしたたかな適応をみせている姿が、まぎれもなく見つかるのではないだろうか。

(稲角 暢／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

山本佳奈 著

残された小さな森

ータンザニア 季節湿地
をめぐる住民の対立ー

昭和堂

2013年 232ページ
4800円+税



アフリカ農村地域では、共有地の利用に関する規制や罰則はほとんど存在せず、共有地は個人個人の裁量で利用されてきたと報告されている。その背景には、アフリカ大陸の人口密度は他の大陸と比べて低く、余剰の土地が多く残されていることがある。そして、そのような余剰の土地が、共有地として地域住民に利用されるようになったと指摘されている。現在、グローバル化による政治変動や市場経済化、急激な人口増加によって、アフリカ農村住民の価値観は多様化している。人びとの価値観が多様化するのに伴い、一部の地域住民は共有地を私有地として囲い込むようになっていった。著者の調査地であるタンザニア南部ボジ高原では、季節湿地が共有の放牧地として利用されていた。しかし、1980年代以降、土地不足が深刻化したことで、季節湿地の大半は私有地として、一部の地域住民によって開墾され始めた。そして、地域内では、共有地の私有化に賛成する人びとと反対する人びととの間で、対立が生じた。本書で、著者は共有地である季節湿地をコモンズと捉え、季節湿地が耕地に開墾されていく過程に注目して、土地利用が変化した経緯と背景を明らかにしている。そして、耕地化をめぐる住民の対立と和解の事例を通して、住民が主体的にコモンズのあり方を模索していく姿を描いている。

ボジ高原は、タンザニア南部におけるコーヒーの大生産地で、コーヒーは重要な商品作物である。かつてボジ高原では、焼畑農耕によってシコクビエが栽培されていた。しかし、20世紀にコーヒー栽培が導入されると、コーヒー栽培を核とした常畑栽培が営まれるようになっていった。市場経済化が進み、商品作物の重要性が増すに従い、さらにコーヒーの栽培面積は拡大

していった。その後、コーヒーの価格が低迷した際には、トウモロコシ畑の一部をコーヒー畑に変えることで、地域内でのコーヒーの栽培面積はさらに拡大された。そして、現在は、もともと放牧地として利用されていた季節湿地を私有地化して、そこをトウモロコシ畑に開墾している。人びとは、季節湿地をトウモロコシ畑にすることで、食糧を確保しつつ、コーヒー栽培を拡大することに成功した。著者は、タンザニアのボジ高原において、2004年8月から2011年9月までに計20ヶ月にわたる断続的な現地調査を実施している。本書は、現地調査で得たデータをまとめて書き上げた博士論文をもとに出版された。

本書の第2～6章では、聞き取りや参与観察、地形・土壌・水環境に関する観測と分析によって、経済・社会・政治の面からグローバル化による地域の生態や生業、生活への影響を明らかにしている。そして、第1章と7章では、当事者の証言や会議での議事録、空中写真をもとに、第2～6章のような環境の変化に伴って人びとの価値観が多様化したことにより、共有資源である季節湿地の利用をめぐる対立が生じ、そのなかで共有資源のあり方がより現状に即したものと変化していったことを分析している。

第1章では、トウモロコシ畑を作るために共有の放牧地として利用されてきた季節湿地を私有化しようとする人びとと、それに反対する人びとの間で生じた対立を事例として取り上げている。そして、ここでは、一人の若者が季節湿地を耕地化したことをきっかけに、共有地の利用方法が慣習的なものから現状へ適したものと変わっていった様子を述べている。

かつてボジ高原に暮らす人びとは、自然資源を多用してきた。しかし、人口増加や市場経済化によって資源開発が進み、人びとの自然に対する知識が多く失われ、自然との関わり方が変化している。第2章では、植生調査と採集活動の観察結果から、人びとの自然に関する知識の大部分が失われている一方で、有用樹種であるイブラ(*ivhula: Painari curatellifolia*)、食用の野草であるシナノキ科のイトゾ(*itozo: Corchorus aestuans*)やゴマ科のウサンブエ(*usambwe: Sesamum angolense*)、アオイ科のイヴワ(*ivuwa: Hibiscus cannabinus*)、食用のネズミや小魚、昆虫などの残された特定の植物や動物との関わりはむしろ深まっていることを論じている。

第3章では、世帯ごとの農業経営に関する聞き取り情報をもとに、化学肥料を用いたトウモロコシの常畑栽培や商品作物であるコーヒーの栽培が導入された経緯と、季節湿地を耕地化するに至った背景について考察している。

ボジ高原では、4種類の在来農法が営まれていた。しかし、近年のトウモロコシ栽培と稲作の導入は、季

節湿地の耕地化を進めるとともに、在来農法にも変化を与えている。第4章では、継続的な水環境の観測と土壌や地形に関する化学分析の結果から、季節湿地で営まれてきた在来農法の詳細を紹介し、それが湿地の環境を生かしつつ水環境を調節する技術を有していることを論じている。そして、これらの在来農法の変化と湿地の耕地化による水環境や植生への影響について考察している。

第5章では、GPSデータをもとにして作成した土地利用図から、ボジ高原の人びとが、季節湿地の利用形態を変化させながら、土地不足の問題を解決し、地域経済を発展させていったことを述べている。

季節湿地の耕地化がすすみ、放牧地が大幅に減少したにも関わらず、ウシの飼養に関する問題はほとんどおきていない。第6章では、ウシの飼養頭数と植物バイオマス量の分析によって地域内でのウシの所有状況の変化に関する調査結果から、ウシを多頭飼する世帯が減り、ウシを少数だけ飼う世帯が増えたため、1980年ごろから現在までに人口や世帯数が倍増したにも関わらず、地域内でのウシの頭数が一定に保たれたことを論じている。

第7章では、季節湿地の耕地化が進められたことで放牧地が急速に減少し、ウシの飼料が確保できなくなったことに危機感を抱いた一部の住民が、行政を資源の管理と運用に巻き込み、私有化された季節湿地の一部を再び共有地にすることに成功したという事例を紹介している。

終章では、これまでの章の内容を総合的に考察し、住民の主体的な働きかけで、共有地であった季節湿地の利用がより農村地域を取り巻く現状に適したものと再構築されたと結論づけている。

ボジ高原における湿地の耕地化は、住民全体の意見として推し進められたわけではなく、人口増加と市場経済化に起因した土地不足によって、住民の間で湿地の利用をめぐる思惑が衝突した結果起こった。地域住民は、共有資源である湿地に対して異なった価値観を有している。生存基盤の確保のために耕地化に賛成する意見があれば、土着信仰への畏敬や放牧地の確保のために耕地化に反対する意見もあり、これらの意見が季節湿地の利用をめぐる衝突した。本書は、アフリカ農村の住民が、共有資源の管理に関する対立と折衷案の模索を通して、地域の文化や社会に即しつつ、人口増加や政治経済の変化にも対応できるような新しいコモンスの利用と管理形態を生みだしていく様子を詳しく示しており、グローバル化によって住民の価値観が多様化する農村社会における環境ガバナンスのあり方を考えるうえで、参考にするべき一冊である。

(砂野 唯/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

鈴村和成 著

書簡で読む アフリカのランボー

未来社
2013年 240ページ
2400円＋税



『地獄の季節』や『イリュミナシオン』などを20歳までに発表し、ヨーロッパ文学界のみならず、哲学や現象学にまで多大な影響を与えた「神童」アルチュール・ランボー。彼は20歳で詩と決別し、残りの人生をエチオピアのハラルで「静かに」過ごしたと考えられている。本書は、ランボーが20代半ば以降に書いた書簡とランボーの詩には連続性があり、ランボーが詩と決別したことはなかった、と主張し続けてきた著者が、ランボーは生涯一貫して書簡作家(エピストリエ)であった、という新しいランボー像の提示を試みたものである。

本書では1880年8月17日にアデン到着を家族に報せる書簡を皮切りに、ランボーの160通にも及ぶ家族宛書簡や商用書簡が分析される。興味深いのは、これまでランボーが書いた詩と書簡の内容に連続性を見いだしてきた著者が、詩や書簡の内容よりもアドレス(宛先)が重要であることを指摘し、変化するアドレスを丁寧に追うことで、ランボーは生涯一貫して書簡作家であったことを明らかにしている点である。アデン到着後、約7年間にわたってランボーが家族に宛てた書簡には、ランボーの詩との連続性を見いだすことができ、著者はこの時期のランボーのアドレスが家族であったことを示している。カイロ到着を家族に報せる1887年4月7日付の書簡以降、ランボーの家族宛の書簡は「沈黙」ともとれるような内容の薄いものとなる。著者は、ここで「沈黙」と感じるのはアドレスが変わったからであるとする主張する。その根拠として、同年8月25日と27日にエジプトのボスポラス紙に掲載されたランボーの旅行記や、それ以降にランボーがアデン副領事エミール・ド・ガスパリヤやシオア王室顧問官であったスイス人技師、アルフレッド・イルグ、に宛てた多数の書簡に詩との連続性、ランボーらしさがあることを著者は示す。そして著者は、アフリカでのランボーの主な仕事は、コーヒーや武器を売るのではなく、あくまでも「書くこと」であり、ランボーは「沈黙」したことなどなかったと主張する。最後に、著者はランボーが20歳までに書いた詩にもアドレスがあったことを説明する。著者はランボーの詩の多くが友人等

に宛てた書簡に同封されていたことを述べたのち、『地獄の季節』は当時ランボーと同棲していた詩人、ポール・マリー・ヴェルレーヌに宛てたものであることを示す。更に『イリュミナシオン』についても、ロンドンでランボーと同棲していたジェルマン・ヌーヴォに宛てたものであると同時に、アドレスがヴェルレーヌからヌーヴォに変わったことを示す書簡だったと分析する。以上のようにランボーのアドレスの変遷を丁寧に追うと同時に、ランボーらしさを見いだすことができる書簡を連続したものとして分析することにより、著者は「ただ一人の〈書簡作家(エピストリエ)〉がランボーのうちに一貫して持続した」(251ページ)という新しいランボー像を提示することに成功している。

さて、エチオピアをフィールドとして研究を行う筆者として、本書は以下の二つの点で興味深い。一つはランボーを専門とするフランス文学者によって書かれている点であり、もう一つはランボーが書簡を通じてアフリカにおける自分自身の立場に疑問を投げかけている点である。本書の著者である鈴村和成氏はランボーを専門とするフランス文学者であり、『新訳 イリュミナシオン』(思潮社、1992年)や『ランボー全集 個人新訳』(みすず書房、2011年)を発表している。ランボーの作品や書き方のスタイル、及びランボーの生涯を理解しつづけた著者が、フランス語で極めて学術的に記された、ランボーが見たエチオピア、を丁寧に解説しているのである。極めて貴重な歴史資料を著者が翻訳することで、更なる貴重性が生み出されていると評価して良いのではないだろうか。ランボーが書簡を通じて、自分自身の立場に疑問を投げかけているという点は、その姿がフィールドワークを行う研究者と重なり興味深い。例えば、ランボーが1888年1月25日に家族に宛てた書簡である。

ここ紅海の商売はすっかり変わってしまいました。六、七年前とは事情がちがいます。

こういうことになったのは、四方八方からヨーロッパ人が侵入してきたからです。イギリス人がエジプトに、イタリア人がマサウアーに、フランス人がオボックに、イギリス人がベルベラに、というわけです。それに聞くところでは、スペイン人も近くこの海峡の近辺の港を占領するというんですよ！あらゆる政府がこの呪われて荒れ果てた沿岸地方のいたるところに、何百万(総計すれば何十億)という金を蕩尽くしにやって来るのです。地球上でいちばんすさまじい風土のもと、原住民が食い物も水もなく、何か月もさまよっているこの沿岸に、ですよ。それでベドウィンの胃袋に投げ込まれるこれら数百万の金ももたらすものといえば、ありとあらゆる種類の戦争と災厄でしかないんですからね！そうはいつでも、たぶん僕もここでなにか仕事を見つけるんでし

ようけれど(149～150ページ)。

西欧諸国が触むアフリカの行く末を嘆きつつ、自分もアフリカを触む一部であることを暗示させる、皮肉に満ちあふれ、自分を戒める文章ではないだろうか。このようなランボーの姿は、世界経済やグローバル化の影響を受けて変化しつつあるアフリカの姿を嘆きかつ悩みながらもその姿を研究対象にする研究者と似ている。そういった意味で、本書は研究者がフィールドにおける自分自身の立場を再考する機会をも与えてくれるのである。

(伊藤義将/京都大学アフリカ地域研究資料センター)

澤村信英・内海成治 編著

ケニアの教育と開発

—アフリカ教育研究のダイナミズム—

明石書店
2012年 288ページ
4800円+税

ケニアの教育と開発

アフリカ教育研究のダイナミズム

澤村信英・内海成治



Education and Development in Kenya
The Dynamics of Educational Research in Africa

本書は、初等教育を中心としたケニアの教育開発に関する論集である。アフリカを対象とした教育開発関連の本はいくつか出版されてきたが、編者が「まえがき」でもふれているとおり、本書の最大の特徴は複数の研究者がケニア1国の教育に関して教育学のみならず、心理学や文化人類学などの手法を用いて、多様な視点から分析を試みている点である。本書は全部で13章から構成されており、「伝統的社会と学校」「子どもの生活世界と学校」「地域コミュニティと学校」の3部に分類されている。これらのテーマ名からもうかがえるように学校を社会と切り離して考えるのではなく、社会を構成する一部として捉えその関係性を明らかにしようと試みている。

これまでのアフリカの教育開発研究ではマクロな視点から統計資料や政策文書の分析をおこなうようなものが中心であった。もちろんそのような政策レベルの話も教育開発を考えるうえで不可欠であることは間違いないが、実際に学校で学ぶ人々、教える人々の姿がみえてこないものが多く、それぞれの地域における学校教育の実態が明らかにされてこなかったといえる。本書にはこれまで描かれてこなかったようなひとりひとりの学生や教師たちに焦点をあてている論文も多く収録されている。たとえば第1章「伝統的社会におけ

る近代教育の意味」では、ひとりひとりの学生の動向をおっていくIST法(Individual Student Tracing Method)を用いることによって各生徒の軌跡をフローダイアグラムによって視覚化し、把握を試みている。この手法によって進級者数、中退者数、留年者数といった数からはわからない、順調に進級する生徒、留年しながら進級する生徒、中退と復学を繰り返しつつ進級する生徒の把握を可能にしている。第5章「小学校の文化的特性」では、エスノグラフィの手法を取り入れ、非公式な会話や観察を中心とした調査から、生徒間、教師間、生徒・教師間でどのような相互作用や相互依存関係があるのかを検討することを通して学校の文化的特性を明らかにすることを試みている。生徒間の物の貸し借りや、教師間の食事の共有や会話にみられるような「助け合いの慣習」が、生徒が就学を、教師が仕事を続けることに対する安心感を与えているという。また、生徒と教師の双方の間にある学校に対する葛藤とジレンマを「受験競争」にまつわる事例から描き出している。これらの事例を通して、著者はこれまでの教育開発研究で見落とされてきた人びとの情緒的側面が、子どもや教師にとって重要な意味を持ちうることを指摘している。第10章「小学校女性教師によるコミュニティ開発」では、ひとりのマサイの女性教師のライフヒストリーの事例を通して、エンパワーメントの過程や女性の社会参加を促進する要因を検証している。エンパワーメントの概念を開発援助機関や政府系機関などの外部者からの働きかけによる意識変容として捉えるのではなく、生活の中での気づきから問題を内在化し、現状を変えるべく行動していく自発的な能力開発の過程として捉えることを提唱している。

編者は本書の限界として、初等教育が中心であり高等教育や成人教育については触れていないことをあげている。教育援助は教育段階ごとにおこなわれることが主流であり、教育開発研究も各教育段階で区切って考えられている。しかし、学校に通う学生たちの目から見れば、それぞれの教育段階は連続するものである。各教育段階がいかに接続しているか、個々の学生がどのように学歴を積んでいくのか、といった学生個人のライフコースに注目した視点も重要である。そのような視点も取り入れたうえで、なぜ学校教育を普及させなければならないのか、各社会において学校に通うことが個人にとってどのような意義があるのか、を今一度問う必要があるのではないだろうか。

(有井晴香/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)